

郷土の古文書

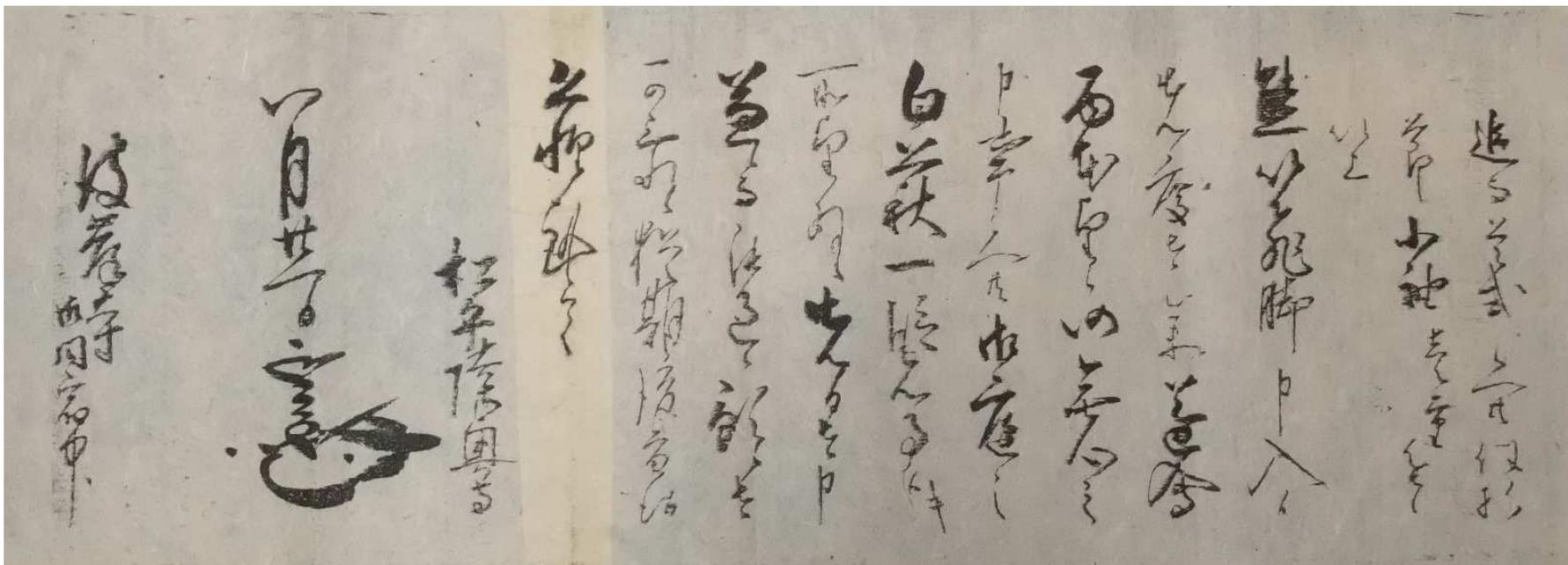
「その2 伊達政宗の白萩所望状」

解説

これは、仙台藩主伊達政宗が武蔵国多摩郡横沢村(現あきる野市横沢)にある、真言宗の古刹大悲願寺こきつだいひがんじに宛てた書簡です。当山第十五世秀雄しゅうゆうは第十三世海誉上人かいよしょうにんの弟子で、政宗の末弟です。そのためか政宗は何回か当地を訪ねたといわれています。この書簡には、政宗が以前に来山した時、庭の白萩が見事に咲いていたが、その時は遠慮して帰り、後日わざわざ飛脚を以って白萩を所望してきた旨が書かれています。書かれた年は『政宗公実記』より、元和9年(1623)と推定されます。月日は陰暦を用いているため、現在の9月下旬となります。

昔の書状の書き方は「態以飛脚・・・」のところから書き出し「・・・恐惶謹言」まで書いて、書ききれない場合に追おってが書き進み、もっと書く場合、最初の1、2行目の行間、次は2、3行目の行間へと書き進むので、読むときもその順番となります。

*尚大悲願寺に残る古過去帳には秀雄ヲとかなをふってあるものがあります。



解説文

追而是式二候へ共任折

節小袖壹重進候

以上

態以飛脚申入候

先度者参遂会

面本望候仍無心之

申事候へ共御庭之

白萩一段見事候キ

所望致候先日者申

兼候而罷過候預候者

可恭候猶期後音候

恐惶謹言

松平陸奥守

八月廿一日 花押

彼岸寺御同宿中

口語訳

わざわざ飛脚を立てて申し入れます。

この間、そちらへ行ったときにはお

会いできて満足でした。

頼みたいことがあるのですが、

あの時、お庭の白萩がひときわ見事

だったので少し分けてもらいたいの

です。

先日は言い出せなくて、そのまま帰っ

てきて今まで過ごしてしまいました。

頂戴できればありがたくうれしいです。

とり急ぎ一筆したためました。

謹んで申し上げます。

追って、こればかりの品ですが、間に

合わせに小袖をひと重ね進呈します。

以上

松平陸奥守

(二六三三年)

八月廿一日

花押

(悲願)

彼岸寺御同宿中